

今月の声

主宰代理 近藤 真奈美さん

読み聞かせグループ 本の花束

「主役は『本』と子どもたち」 読み聞かせ10年 つながる人と人・心と心



「読み聞かせ」を行っている地域ボランティア「本の花束」主宰代理・近藤さんはそう話す。

あるとき小学校の先生の「朝自習の時間に、子どもたちに読み聞かせを」という言葉に保護者が集まり始めた活動は、今年で10年の節目を迎えた。自分の子どもが卒業した後も続ける人や新しく入った人など、今のメンバーは約40名。朝の「クオタイム」という20分間に、子どもたちに本の読み聞かせや紹介をする。10年という一言では言い表せない積み重ねが実を結び、今では読書月間に図書室に1学年を集めて聞く「お話会」や、夏休みの行事でも体験講座を開くなど、すでに学校教育の一環としての役割を担っている。

「絵本には高学年対象のものや、大人が読んでも楽しいものもたくさんあるんですよ。この前（ボランティアの）講座で『泣いた赤おに』をやったんですが、聞いている大人たちが泣いてましたから（笑）。本当に良い物語は読み手の年齢に関わらず良いもの。『本の花束』では、それを聞き手にでき

「一期一会。そんな本との出会いのきっかけを作ってあげたい——」。

大田区山王小学校では毎週、子ども



大きなパネルに、登場人物や背景を貼ったりはがしたりする動きが面白い「パネルシアター」。「昔も今も子どもたちは「お話」が大好き。それは変わらない。」

るだけ上手に伝えようと、一人ひとりがとても勉強熱心だ。集まってる練習はもちろん、今年で5年続いている「読み聞かせボランティア交流会」では、ボランティア組織同士が横のつながりを作り、それぞれの技術や悩みを共有しあう。今では大田区に59校ある小学校の40校以上で、読み聞かせの活動があるとのこと。読み聞かせの他にも、紙芝居や「パネルシアター」、本なしで物語を話す「素話」など、さまざまな角度から本を紹介する。子どもが本に興味を持つきっかけになるのはもちろんのこと、読み聞かせに慣れた子どもは、人の話を聞く姿勢が自然に身につけているのだとか。

「たとえ自分で読めても、人に本を『読んでもらう』のは、ほとんどの子が好き。そして私たち子どもからパワーをもらっているんです」と話す近藤さん。

ゲームや携帯に偏りがちな子どもたちに生の「声」を届けることで、心で触れあうことを教えてくれる。そんなたくさんの本との出会いが、これからも子どもたちの心を豊かに彩り、成長させていくことだろう。



小学校入口の「本の花束」装飾スペース。季節ごとに力作がお目見え。

読み聞かせボランティア「本の花束」

<http://www.geocities.jp/honohanataba/>